毎日新聞　平成21年11月　5日

毎日 11/5

宇佐市の漁業再生へ

長洲海岸干潟改良　環境浄化剤を散布

長洲海岸のビーチクリーンアップで中学生も海岸に環境浄化剤（バケツの中）をまいた＝宇佐市提供

宇佐市は、このほど周防灘に面した長洲海岸にある干潟の改良に乗り出した。その第一弾として、水質の改良に実績のある「バイオ化研」（熊本市）が開発した環境浄化剤を、長洲漁協近くの干潟にまいた。同社は韓国やフィリピンなど海外のほか、有明海などで水質浄化に一役買っている。

同市林業水産課などによると、アサリなど生産が減少しているは、干潟にヘドロが堆積し、水質が悪化しているのもその一因という。

そのため、9月16日、同漁協東側の干潟の一部1万4000平方㍍（横100㍍、縦140㍍）に、ヘドロなどに含まれる有機化合物を分解するバクテリアを砂（天然ゼオライトを細かく砕いたもの）に混ぜた環境浄化剤142袋（1袋20㌔㌘）を散布したほか、10月24日、長洲海岸であったビーチクリーンアップで、長洲中の生徒もまいた。来年3月にも散布を計画しており、経費は計約500万円。

県北漁業の中心である周防灘に面した長洲漁港は、広大な干潟を利用し、昔からのり養殖や塩生産が盛んだったが衰退。小型底引き網漁業によるタイやハモのほかアサリ、ハマグリも取れ、漁獲量は85年の約7500㌧をピークに、17年には約1400㌧まで落ち込んだ。県漁協宇佐支店の組合数も98年には658人いたが、07年には387人に激減した。ノリ養殖にいたっては、最盛期約400人いたが、今では10人足らずになっている。

危機感をもった市は9月に、漁業再生のプロジェクトチーム（市、漁協職員らで構成）を発足させ、3年計画で、新規就漁者の確保など漁業再生の対策を練っている。

【大塚実知恵】